第6回方法論研究会

社会性の起原と進化:人類学と霊長類学の協同に基づく人類進化理論の新開拓

第6回方法論研究会

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時: 2021年11月3日(水・祝) 14:00~18:30

場所: ハイブリッド開催 (Zoom、AA 研 304 室)

内容:

0. 振り返り

河合香吏 (AA研)

これまでの議論のまとめ

- 文献紹介:「シンポジウム フィールドからわかるということ」『季刊人類学』20-3 (1989) から
 - 1-1) 川添達朗(AA研)

「フィールドワーク再考―フィールド理解の非定型化のための一試論(松田素二)」

1-2) 森下翔(大阪大学)

「フィールドでの観察についての一試論一霊長類学の立場から(高畑由起夫)」

2. ブレインストーミング

3. 文献紹介の内容(発表レジュメ)

3-1) 松田素二(1989) フィールドワーク再考―フィールド理解の非定型化のための一試論 (川添達朗)

フィールド理解の「定型」と「非定型」

第5回方法論研究会の次のステップとして…

・行動から記述を生成するプロセスのすり合わせ

第6回方法論研究会

・『松田素二(1989)フィールドワーク再考—フィールド理解の非定型化のための一試論—』

1. はじめに

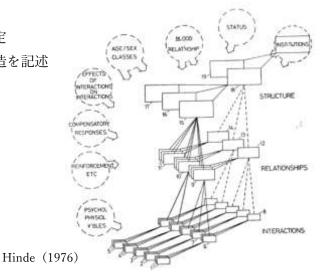
- フィールドワークへの懐疑
- ・現地に滞在したこと("being there")と、民族誌を書くこと("being here")の間にある、単なる技術的な手続きの問題ではない隔たり
- ・隔たりが形成されるメカニズムに立ち戻る

Ⅱ. フィールドワークの図式 (≒記述の構造?)

- ■機能 (解釈) 主義的図式
- ① 対象社会の特質をアプリオリに設定
- ② 語り(行動、行為)を解釈する構造を記述
- ・Hinde (1976) と類似
- ・行動(行為)、関係、構造の定型
- ・松田 (1989) の図2と一緒
- ■構造主義的図式
- ③ 経験と構造の分断

Ⅲ、理解の定型回路

- ■非四項図式(非定型的図式)
- ④ 分析、解釈、理解からの脱却



- (1) これまでのモデルの問題
- ・「個への自閉」、「全体への拡散」とは?
- ・機会的な処理による、「彼ら」の語りが持つ豊かな生と実践の力の喪失
- ・語りに解釈すべき意味をアプリオリに仮定することは、自明のことではない
- (2) 理解の定型の世界
- ・民族誌の記述の問題と理解の問題
- ・フィールドで得たことをもとに記述をして読者の理解を得るのではなく、理解そのものが すでに出来上がっている
- ・フィールドで得たことについての検討は必要ないか
- (3) アフリカ都市と理解の定型回路
- ・記述の「意味」の分析ではなく、外在する定型回路を問題にする必要
- ・言説によって生み出されるリアリティー

IV. 語るというふるまい

- ・語るというふるまいの側面と語られたこととい う言表の側面
- ・意味(「なぜ」)の連鎖の復元は、語られたことについての何かに過ぎない
- ・ふるまいの意味:主体と場の形成
- ・ 反復的な呼びかけにからみとられ、それに応えることによって形成される主体
- ・毛づくろいやパントフートのような音声コミュニケーションも呼びかけの一種?

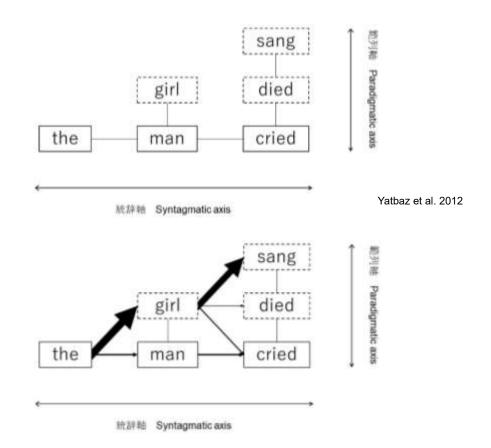


Ⅴ. 語られたこと――理解の非定型化のために――

- (1) 語られたことと定型回路
- ・語りに込められた意味の解読、語り手の属性の分析
- ・すべてを合理的に連結し、定型化する近代知=アルゴリズム(FS コロキアム)
- ・「彼ら」と「われわれ」の間の理解のつじつま合わせ
 - 「彼ら」と「われわれ」の共役可能性
 - 共役可能性?
 - 「彼ら」同士の共役可能性を観察する「わたし」(cf. 第8回定例研究会)

(2) 言表と範列

- ・統辞論的意味の連鎖と範列的な操り (cf. 第5回方法論研究会)
- ・語り(行動・行為)一意味一構造という因果の連鎖からの脱却
- ・担い手の意思や属性に外在し、社会の意味や構造とは非連続であるという言表観
- ・霊長類の相互行為も外在的、社会の意味や構造と非連続と考えてみる?
- ・有限の範列的な選択肢の中から析出する現象=範列的操り
- ・それが転倒され、絶対不変の法則になることがある(順位とか毛づくろいとか?)
- ・意味の連鎖を問わないにもかかわらず、「彼ら」のふるまいの志向性を感ずる根拠として の「範列的操作の力の持つ共役性」とは?
- ・霊長類の相互行為の連鎖やその意味、構造が、Hinde (1976) に示されているほどアプリ オリ (統辞論的/定型的) ではないのでは?
 - 外在的な相互行為
 - 範列的な選択肢
 - インタラクション→関係→(別の)インタラクション/関係、にみられる循環



VI. 次のステップ?:観察、記録、記述の方法、作業仮説の立て方の検討… 等質なデータで協働するために、

(霊長類学)

- ・統辞論的構造から範列的構造へ
- ・選択肢を増やすことで抽象度を高める(第2回方法論研究会)
- ・何を観察するのか、どうやって記録し、記述するのか
- ・機能的、適応的であることを所与としない仮説(how を問う仮説?)

(人類学)

- ・why ではなく how を問いたい (第5回方法論研究会)
- ・範列的構造から析出される現象のパターン
- ・数量を扱うこと≠機能的、解釈的、適応的
- ・数量を扱うことで、howをより豊かに示せないか?

第6回方法論研究会

3-2) 高畑由紀夫(1989)フィールドでの観察についての一試論―霊長類学の立場から (森下翔)

はじめに

(52-3)人類学者:おのれの仕事が自己表現としての性格を持つ

対象を観察・分析・描写する作業:必然的にその作業をおこなう自分自身を理解すること を要求

レヴィ=ストロース: この問題をはっきりと意識し、その意味を積極的にとらえようとした

ルソー:人類学の始祖,自分以外の人間を知ることにより自分を知ろうとした最初の人 (それ自体は文化人類学者も共感する目的の一つとして掲げるだろう)

(52-4)霊長類の社会学的研究:動物学と人類学のはざまのコウモリのような境界領域 自分自身を知らねばならないという呪縛からまぬがれることは不可能 サルを観察すること:サルからさまざまな「感覚的印象」を感じとる自分と向かい合うこと その印象を言葉によって表現すること:自己表現としての性格がある

(53-2)But 「自分自身を知る」と述べたからといって、霊長類をヒトを理解するための代用 品的なものとしてあつかうというわけではない

なぜ強調したか?→日本の霊長類学は人類学への志向強, 擬人主義的性格が濃い

そうした風潮は批判されてきた e.g. 水原洋城、ニホンザル現況研究会若手

But 現在でも「本当はヒトがやりたいのだが、とりあえずサルでも」などの発言を耳に することも珍しくない

e.g. ある座談会の霊長類学者「僕たちは別にサルそのものを知りたくてやっているわけではなくて・・・」

(53-3)サルはサルそのものがおもしろい

その上でサルを見ている自分の姿に気づくとき、おもしろさがより深くなる

種社会について

(53-4)われわれはいまだ今西錦司の種社会論を出発点としている

集まる動物の社会だけが社会ではない, 集まらない社会も集まらないという性格を持った 社会

i.e. 「アミーバにはアミーバの社会があり、サルにはサルの社会」が存在, 「その生活形が 異なっているのと同じ程度に、その社会生活もまた異なっている」

→「社会」ということばが連想させるような擬人主義的においがほとんどただよわない、徹 底的に抽象化された思想

第6回方法論研究会

この意見が影響を与え続ける理由:「集まらない」という現象との差異を意識することに よってはじめて「集まる」という現象を正当に評価することができるから

(54-2)1960 年代欧米の研究者: チンパンジー社会に母親と子供以外の永続的な関係はない →日本人研究者: 今西の影響で離合集散しながらも特定のメンバーから構成されている チンパンジーの単位集団の存在に気づいた

それをふまえて:「あいさつ行動」をかわしつつ絶えず出会ったり別れたりするチンパンジーの社会を個体性が発達したより複雑な社会としてとらえる

i.c. スイスの霊長類学者クマー:母系的血縁関係を軸にきわめて秩序だった行動をおこなうヒヒの社会のほうがチンパンジーの社会よりもヒトの社会に近い

(54-3)今西の種社会論:抽象的、一般にはなじみにくい

抽象的だとなじみにくい、という感覚は文化人類学者には希薄か。むしろ理論が抽象的であればあるほど意味もなくありがたがるような部分もないではない

方法や主題の統一による同一の基盤、というものが通常望めないことも一因か

今西進化論の是非もからみ、誤解を受けている面もある

座談会の別の出席者:「おサルさんはわれわれと非常に近いので、一緒にしても無理ない と思うのですが、昆虫とサルの行動的同一性となると...」

But 動物社会学の分野においての議論として、昆虫とサルの社会を同一の射程内におこうとする透徹さ、日本の霊長類学者は力を得ている

実際に種間比較をしているようには見えないが、ここで得ている「力」とはいかなる性格のものか?

この点を等閑して種社会をホーリズム的なものと受けとるのはむしろ今西理論のもっとも抽象的な力強い部分を矮小化するだけ

esp. 西欧的な見方と安易に対置させるような遇し方

e.g. 『今西進化論批判の旅』と銘打ちながら種社会になんらの深い理解も示せなかったホールステッドと同じ地平にとどまるにすぎない

今西進化論をめぐる論争状況からそれなりの時間を経て、こうした今西評価がどう変遷したのか、という点は気になる。今でも種社会論の起爆力のようなものはあ(りう)るのか?

この節は誰を意識した批判なのか?今西進化論批判者は、別の特徴づけをすると、 どのような学者なのか?欧米-日本の研究者のさかんな対比がおこなわれているが、 欧米の方法論を無批判に移入して今西の議論よりも無前提に優れているとするよ うな(日本の霊長類学者の)研究が問題となっているのか?

第6回方法論研究会

観察法-手練手管として-

(55-2)われわれ〔=霊長類学者?〕がどのようにしてサルを見ているのか

具体的な観察法を少し紹介

研究者:しょせん自分が見たいものだけを目にとめてしまいがち

But 自分に見えないものもなんとか感じとろうとささやかな努力を積み重ねているという証拠として

もちろん観察法はすべてを解決できる打出の小槌ではなく、用心しながら操る**手練手** 管:フーコー「17 世紀以来、観察というものは、ある種のものを体系的に除外すると いうことを条件とする感覚的認識となった」

個体識別

(55-3)個体識別:研究者にとってはあまりにもあたりまえの作業

ほかの〔=霊長類学者以外の〕人に「あのサルはこういう名前で…」と説明すると驚いて もらえる「話の種」

どの研究者もはじめはすべてのサルが同じ顔に見えることにとまどい、キズやホクロなどのはっきりとした特徴で識別することを学ぶ。しかし、しだいに彼らの顔に慣れはじめ、やがて後姿だけでも誰かわかるようになる(いわば奥義の世界)

書きぶりがマリノフスキーの方法についての記述を彷彿とさせる。

(55-4)いくつかのフィールド:何世代にもわたって個体識別し続けることで、母系でつながる血縁関係のネットワークを明らかにする作業が続けられている

e.g. 嵐山のニホンザル・キイロヒヒ、カヨ=サンティアゴ島のアカゲザル

個体識別を経て抽出された血縁関係や「家系(あるいは血縁集団)」と呼ばれる個体の集まり:社会交渉などに大きく影響を及ぼす

当然ながらサルはかなりの程度までこうした血縁関係を認知(かなり強い言い方に聞こえるが一それは「血縁集団がある」という理論とセットになった「認知」だ)している e.g. 嵐山のニホンザル

毛づくろい:1~3 親等にあたる個体間

遊び:2~4 親等にあたる個体間

こういうものを「認知している」と捉えることで、たとえば4親等の関係にある者に対する毛づくろいは「例外的な」ものとして理解される。しかしおそらくは、たとえば「特定の4親等関係にある個体とやけに毛づくろいをするニホンザル」もいるだろう。そうした個体をpositive なものとして捉えることと、理論の在り方は結びついている。

(56-2)個体識別:一般的な慣れ・ルーティン=ワーク的「戸籍づくり」にとどまらない重要性

個々のサルを姿形だけで識別しているわけではない:無意識に態度, ふんいき, パーソナリティなどをゲシュタルトとして感じとっている

第6回方法論研究会

→個体識別自体がすでに個々のサルから受けとるイメージの整理, 再確認という性格を 帯びる

こうしたイメージ, このサルとあのサルは違うという差異の認識: これから述べる観察 法にとって基本的なステップとなる

記録すべき事象の性格―「できごと」と「状態」―

(57-2)アメリカの霊長学者 Altmann:観察法の整理を試みた

まずとりあげたのは記録すべき事象の性格とは?「記録すべき」もわからない。

フィールド・ノートに書き込まれる行動や交渉 (採食, 移動, 毛づくろい etc.) は操作的に 定義され, 数値として集計

e.g. ニホンザルの交尾:オスはメスに 40~60 秒の感覚でくり返しマウントしたあとで射精するが、射精にいたる前に中断することもまれではない

→以下のような 3 つのうちのいずれか観察された場合に<u>終了したとみなすという操作的</u> 定義を経てはじめてひとつのできごととしてあつかうことが可能になる

- (1)5 分間以上のマウンティングの中断
- (2)オスかメスかのどちらかが 15 メートル以上のマウンティングの中断
- (3)射精

行為を「交尾」として操作的定義へと落とし込み、「射精」というゴールを設定して、そのゴールにいたらぬものを「中断」として区別することで記述している(しかしもちろん、そもそも「交尾していない」可能性もある。たとえば同じように観察された出来事を「ペッティングしている」ものとして記述するならば、それは射精/中断とは別の区別を持つものとして観察されるだろう。「性のカテゴリーにはないもの」として観察される可能性もあるのかもしれない)。

こうした「行動」の少なからぬものは多義的な性格をもつ

e.g. 「近接する」というごくささいな例にしても無限の意味がこめられている可能性 経験をつんだ研究者:あるオスとメスのペアがそれとなくよりそっているだけで、性的 /非性的ニュアンスを読み取る〔ことができる〕

(57-3)Altmann:各事象を瞬間的に起きてかつ終わってしまう「できごと」/ある程度長い時間その状態が続く「状態」のいずれかとしてとらえることができると指摘

e.g. サルが他の個体にかみつく→「できごと」

毛づくろい:「1回毛づくろいした」→「できごと」/「180 秒毛づくろいしていた」→状態

英語の文法(状態動詞と動作動詞の区別)と関係していそうな区別。別の言語にとってはどういう区別なのか。ただ上の例では動詞で区別してはいない(結果としていまひとつこの区別の美味さが分からない)。

But 「遊び」などの複雑な交渉は「できごと」と「状態」という単純な二分法でとらえき

第6回方法論研究会

れるものではない

早木仁成:チンパンジーのコドモの遊びというつかみどころもない現象を分析

バウトとセッションという概念を用いる

- プレイ=バウト:2頭の間で遊びが始まってから終わるまでの一連の交渉
- 3 分以内の間隔で起きる一連のプレイ=バウトを一まとめにして**プレイ=セッシ** ョンと定義
- プレイ=バウトはいったん終わってもすぐに再開されることが多い, 断続的に続く傾向
- 遊びがどのように「始まり」かつ「終わる」か分析するには、個々のプレイ=バウトよりも遊びのコンテクスト全体、すなわちプレイ=セッションごとの解析の方がよさわしい

結局、これは人間が言葉によって秩序を補っているように見える。行為の操作的定義と中断の関係設定による秩序づけ、想定されるべき社会関係と例外的関係の設定による秩序づけ、etc. 何がその恣意性を制約しうるのか?

→プレイ=バウトとプレイ=セッションの相対的な適切さの比較、という方法は興味深い。両者の「適切さ」の比較が可能になっている前提というのはどのようなものか?なぜ 一方が「適切(ふさわしい)」に思われ、もう一方が「適切」には思われないのか?

(58-2) Altmann: 観察法を 7 つのタイプに整理: アド=リブ観察法, ソシオメトリックマトリックス法, 個体追跡法, 特定の行動の全生起例を記録する観察法, 行動連鎖記録法, ワン=ゼロ観察法, スキャニング法

ここで状態とできごとの区別が活かされている。

アド=リブ観察法:目にとまるものをそのまま記録する「種もしかけもない」方法 →目だちやすい個体や行動に偏ることは避けられず、厳密に定量的な資料を手にすること は望めない

But 予想もしなかった現象が突発した場合などには、「枠組み」を設定していないだけ、 研究者にとっては実り多い結果をもたらすかもしれない

文化人類学者は、予想された現象に別の説明を与えるためにもこういう方法を用いるイメージもある(生態人類学などを除くと観察の多くはアド=リブ観察法を多用する)。

(59-2)アド=リブ観察法以外の方法:いかにして観察上のバイアスを減らし,**自分に見えないもの**を記録するかということに腐心

文化人類学では、こういう「見えないもの」の可視化というのは、ふつう理論レベルで行われるのではないか。観察法の客観化はむしろ、見えるものを見たいものに限定するような効果を持つものに映る。

ワン=ゼロ記録法:誤差を減らし信頼性を高めるために心理学実験などで発達した

第6回方法論研究会

観察時間を短い観察単位(10 秒, 15 秒,...)に分割, 観察対象がその 15 秒間にある状態をとれば (e.g. 母親が子供から 60 センチメートル以内に近接する) スコアを 1, とらなければ 0 と記録して活動を数量化

スキャニング法:もっぱら生態学的研究に用いられる

一定時間ごとに観察者から見える全個体の行動を記録 (移動しないということ?) それらの資料をさらに時刻,日,月ごとに集計し食性や摂食量 (サルが食べた量を費やした時間であらわす),日周期リズムの分析

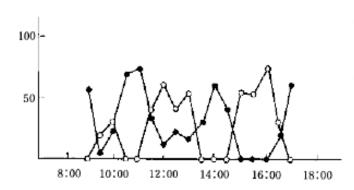


図 2 スキャニング法に よってえがかれた屋 男リズム [Maruhashi, 1981]。15 分ごとにスキャニングして採食(●) と毛づくろい(○)ので ある。

個体追跡法:現在フィールドでもっとも頻繁に使われている

社会に対する注目が挙げられていながら、個体追跡法が一番重宝されるというのはやや不 思議な感じも受ける。スキャニング法のほうが「社会」を見ている感じがしないか(昔同じ ような発言をしたような気もする...)

特定の個体を追いながらその活動や社会交渉をもれなく記録

「できごと」と「状態」のどちらの記載にも適している

観察上のバイアスが比較的小さい(とは?)

But 多くの落とし穴も「木を見て森を見ない」

Goodall:タンザニアのゴンベ国立公園,一頭一頭を個体追跡し膨大な資料,個体間交渉にしか目がいかずに単位集団の存在になかなか気づかなかった

→個体の行動から受けるイメージだけに頼るあまり集団全体のイメージがすりぬけ

(60-2)個体追跡法のもっとも大きな欠点:どんな研究でも「物になってしまう」

長期追跡すればその行動のすべてを記録、まとめれば数値を取得、論文が書ける

→安直さが命とりになりうる

時間と空間

時間軸

(61-1)個体追跡法がもてはやされる理由のひとつ:観察の焦点が明瞭で時間軸と空間軸という時間体系が設定しやすい(空間に関してはどこからどこまでを観察するという、集団の境界をうまく設定するのは難しいということ?;時間に関してはどこからどこまでをひとま

第6回方法論研究会

とまりの活動とみなすかが難しいということ?)

ここでも隠されたワナに用心:リーチの「時間」の英語的観念についての分析 「くり返す」と「くり返しはしない」という2つの矛盾した性質が含まれている 目の前の現象が状況さえ設定されればくり返すのか,二度と起きないと考えるのか(これ は文化人類学でも俎上にのぼってきた基礎的論点)

(61-2)できごと/状態, バウト/セッション, コンテクスト:いずれも各事象をいかにして時間軸にのせてあつかうべきかという試み

時間はそうした努力をあざわらうように次々と難問をもたらすだろう(時間がもたらしているのか?概念の歴史や使用がもたらしているのでは?)

e.g. 「コドモの発達」

アリエス:中世ヨーロッパには「子供」の概念はない, 「小さな大人」が存在していただ け

→ワカモノ期のサルを「小さいオトナ」として見るべきか/それともオトナでもコドモで もない独立した存在として見るべきなのか

もちろん、肝心なのは他のサルが彼らをこのどちらの感覚で認識しているかを知ること(ふつう、ヒトでこういうことをする場合、概念と行為の連関を分析することで妥当性を把握するわけだが、概念の分析が困難な場合にこうした分析は本当に可能なのか、といわれると、私にはかなり疑わしく思われる(言葉なしにある個体を「コドモとして認識する」と言われても、その個体が「コドモとして」認識されているかどうかの判断は、私たちのコドモという語の用法に依存してしまっているし、現に人類学者はそうした概念の西欧中心性をたびたび指摘・批判してきた)。できるとすれば、先のバウト/セッションのように、概念とそれを用いた記述の比較によって、せいぜい「より適当な」概念を探る、「よりよい」記述を探るといった方法になるのではないのか)。あるいは「新しい概念の発明」。

(62-2)ソシュール:共時態と通時態

霊長類学でも似たような発想で資料を処理

- 一定の期間(週,月,出産期,交尾期 etc.)の記録を集計してデータ処理をおこなうが、 これはその短い期間を共時態と認めているということ
- →その期間に記録された現象を, 再現性を前提として, 統計を使って一般的傾向を抽 出する
- →時間で区切られた各共時態が示す一般的傾向を、時間軸にそってならべなおして通 時態における変化(e.g. コドモの発達, 社会の歴史的変化)を分析する

スナップショットを単線的な時間軸に並べて分析するイメージ。

(62-3)実際に直面する現象はこんな単純なものではない

共時態という前提でサルを観察しても、突発的な事件が起こることも(これは、見に行く

第6回方法論研究会

前に、どういう前提でデータを取るか、ということがかなりの程度決定できる、という霊 長類学者の信憑をあらわす記述とみてよいのか?)

e.g. ニホンザルの群れの分裂, ハヌマンラングールの子殺し:千載一遇のチャンス 「覆水は盆に返らず」:不可逆的性格, 日常空間にときおり走る裂け目, 社会構造の断層面をのぞかせる(共時態的観察/一回性の出来事という対比)

But こうした現象も長期にわたって資料を集めれば、「ハヌマンラングールの群れでは 平均して 3~4 年間に 1 回ぐらいの頻度で子殺しが起きる」といったより大きな共時態 の中にのみこまれ、統計処理の対象になってしまうかもしれない

(62-4)水原とリチャード・リーの会話:リー「10年に1度しか起こらないことがなぜ重要なのですか? この事例は一定時間内にこれこれの高頻度で起こる、だからこの行動は大事なのだ、という研究方法上の判断をなぜあなたは大学で学ばなかったのですか?」(これはつまり、共時態下における繰り返し現象こそが重要性を持っている、というリーの主張であるという意味で理解してよい?)

→水原「どうやら私とあなたとは、まったく性質の違う2つのことについて議論しているようだ」(つまり1回的な共時性を破壊するできごと、という意味?リーはそれを無意味と思っていると?)

日常的現象に基づいた確率論的モデルに頼り、非日常的な現象が目からすりぬける愚だけは避けなければならない

(63-2)別の時間の枠について(日常と非日常の区別)

ニホンザル:明確な繁殖周期性, 嵐山群では10月中旬から2-3月頃までが交尾期

一年の過半をしめる非交尾期:非性的な状態,静かで秩序だった時間が支配 個々のメスは1年の約10分の1の間だけ性的に活動状態,非性的な状態こそ日常的

外からはハナレザルというマレビトがあらわれる、木ゆすりなどの誇示行動でメスの気 をひく

群れ内部でも非交尾期には交渉をもつことさえ稀なオスとメスが積極的に近づき配偶関係を結ぶ

(64-2)こうした交尾期と非交尾期の対比:生活のなかに「日常的な時間の流れ」と「非日常的な時間の流れ」が交互に訪れていることを示す

交尾期:リーチの「聖なる時間」、ターナーの「コムニタス」

But 交尾期がはじめれば群れは騒然となり日常的秩序は崩壊

既成の秩序・時間の流れが撹乱される時間

順位と繁殖成功の相関:日常的な非性的世界の秩序と非日常的な性との比較(これ、比較?関係の理解?)という性格をおびる

第6回方法論研究会

(64-3)「進化」の問題

→霊長類社会学者が進化をあつかうなら、比較社会学としてしか扱えない ある(特定の)種の社会と別の種の社会の比較

不可逆的時間軸にそった種間関係、「系統」の問題を忘れてはならない

文化進化の研究書が近年邦訳ふくめいろいろと出ていて(e.g. 『文化系統学への招待』『文化進化の数理』『文化的進化論』『人間進化の科学哲学』『文化進化論:ダーウィン進化論は文化を説明できるか』)、文献はすでに買っており、できれば今日の発表に間に合わせて話をしようと思ったが、間に合わなかった。近年の文化進化についての話をどこかで話題提供的にできれば、という気もしている(使えるかどうかは分からないが;すでにそういう時期はすぎているという気もしないではない)。

空間軸

(64-4)空間軸も単純ではない

「近づく」:「あなたはどういう状況を『近づく』とお考えですか?」

→Goodall: 60 センチという距離をチンパンジーが近づいたかどうかの目安, 彼らが手をののばそうと思えば届く距離

(64-5)「空間的近接」: 社会関係をとらえるのに便利な道具, よく用いられる

森・北村:ニホンザルの個体間距離を調査

サルどうしはたとえ同じ群れのメンバーでも 3 メートルというようなごく近い距離で近接することは少ない、互いに避けあって生活

とことん離れているわけではない、3~10 メートルほどの距離をおいて遊動、「敬して遠 ざかる」状態、そばによりそっているペアは血縁関係 or 特別に親和的な関係にある個体 (特別に親和的な関係はどうやって判断しているのか?)

3 メートルという操作的に切り取られた空間の「ものさし」の使用:近接していれば関係が濃く、近接していなければ関係が薄いという方法論が成立

cf. ホールのプロクセミックス:人間について同様の問題を扱った

(65-2)群れの空間構造:個体の近接よりさらに高次のレベルの問題

伊谷:高崎山群の餌場、群れの二重同心円構造モデル

第6回方法論研究会

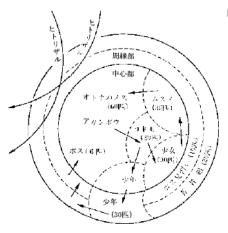


図4 ニホンザルの群 れの二重同心円構造 の模式図 [伊谷, 1954]。

中心部:メスとコドモ,ボス

周縁部:とりかこむ若者組とボス見習いのオス。オスは成長にともないいったん中心部から周縁部に出るが、やがて中心部に U ターンすると考えられた(ボスになれなかったオスはどこへ?; ヒトリザルは一体どこから?)

多くの研究者がこのモデルをニホンザルの唯一の社会構造を示すものとしてほとんど無批 判に受け入れられてしまった

→二重同心円を前提して個々のサルをそこに当てはめる仕事の横行

若手(伊沢)の懐疑:二重同心円構造は給餌による人工的産物, 野生群にはない (これはあとから反証→66-2)

(66-2)嵐山・志賀高原:性成熟前後のオスは中心部に U ターンせず, 自発的に出自軍を離脱 して他群に移籍するのが一般的

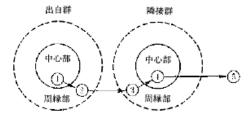


図5 嵐山 A, B 群の資料にもは、1974] よった。 はいる (1974] より。 数字と矢印は はいる (1974] ない成長 (1974] ないない。 はいまない。 は出自群を離れない。 1:0 歳から2歳まで; 2:2,3 歳から4,5歳から7,8歳以上。

→伊谷みずからモデルを修正

伊谷:オスのみが移籍することに着目→ニホンザルの群れは母系的社会

共時態の資料に基づくモデルが通時態での資料によって修正をよぎなくされた例

最近の研究:野生群でもメスたちとそのコドモ,高順位のオスが中心部にかたまり、順位 の低いオスがそのまわりをとりまく傾向

社会交渉と社会関係の分析

確率論的モデルと構造論的モデル

(68-2)霊長類学者:社会関係を社会交渉の積み重ねの形で、統計処理して確率論的なモデル

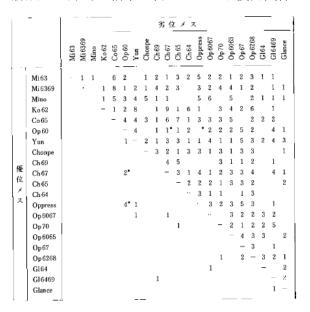
第6回方法論研究会

をつくるという形で表現

e.g. ニホンザルのメスの順位序列

餌をめぐって2頭のサルがひき起こす敵対的な交渉を記録

→多くの二者関係で勝敗が一方的な結果に終わるという優劣関係



[高畑, 1989]

3 すくみ関係もあるが、統計的には無視できる程度(それはどういう意味?3 すくみ関係が「誤差」ということもないだろう(「誤差」だとして、何の「誤差」か?)。実際には何を無視している?)

目に見え記録しうる事象としての敵対的交渉, そこから描きだされる優劣関係, 優劣関係を組み合わせた結果としての順位序列→階層性のあぶりだし

(68-3)「親和性」:親和的交渉の総和として表現される 近接や毛づくろいが頻繁に観察される→関係濃,めったに観察されない→関係薄 →ソシオグラムを作成

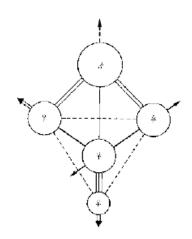


図6 マントヒヒのワン=メール=ユニットのソシオグラム。ユニットは1頭のオトナのオス (ハーレムオス) とオトナのメス数頭、および未成熟のコドモからなる。ハーレムオスとメスとの図の上の距離は、個体間距離の平均値に対応している。各線は、社会的交渉の頻度、矢印はユニット外の個体との交渉を示している [Kummer, 1968]。

第6回方法論研究会

こうした作業はいわば二者関係の「たし算」: 各要素の間の種々の交渉をたしあわせて関係 を導き、その関係を重ねあわせて集団の内部構造を探る

→i.e. 霊長類学者が日頃おこなっているのは、共時的空間において記録された日常的な事象を集計することによって導かれた確率論的なモデルに基づき、構造論的モデルを構築していくこと

そのモデルを通時的な時間の流れにおき、最終的には進化の問題に迫る(しかし一回的な出来事のような分析は、通時性を直接扱っているような性質もある)

(68-4)But 操作的手段による数値化と確率論的モデルによる構造の分析という「たし算」的手法だけですべてが説明できるとはとうてい考えられない

- 交渉が多ければ関係が深い、少なければ関係が浅いという仮定はいつも正しいのか
- 集団は二者関係の集積のみでできあがっているわけではない:二者間の優劣関係を第 三者がきちんと認識しているかどうかについては近年ようやく詳細な分析が開始
- 集団は他集団との差異で輪郭が明確になる:個々のサルも「こいつは私と同じ集団に帰属する者、あいつは違う集団に帰属する者」と日々判断しているはず →自らのアイデンティティをどう感じているのかという問題は、二者関係の集計だけでとらえることができない

手がかりとしてのイメージ

(70-2)もうひとつの手がかり: **イメージ**そのもの, ゲーテの感覚的印象 数値は事実の集積にすぎず、たてるべき仮説を教えてくれるわけではない

観察によって得た資料を人前に出しても恥ずかしくない姿に仕立てあげる作業は、個々の研究者がサルから感じとった印象・イメージに基づいている(私の観察していた地球科学者も、データが人工衛星から自動取得される時代になってそういうことを言いたがったが、これは統計的分析者のある種の憧憬からくるハビトゥスのようなものなのではあるまいか?)

(71-2)霊長類の性行動

アカゲザルの性行動の研究:Kaufmann, Conaway & Koford, Loy メスの生理学的変化と性行動, オスの順位と繁殖成功の相関に関心

→メスの配偶者選択,メスの順位と繁殖成功の相関には関心なし

繁殖季節性が認められるのか、オスには順位にみあう「交尾の優先権」があるのかが彼ら にとっての問題だった

But 1970 年代後半~ メスも配偶者選択をおこない、高順位の求愛行動を拒否する場合もあること、オスの順位に相関した「発情メスに近づく優先権」は「発情メスから選択される優先権」ではないこと、オスとメスの親和的な関係が性交渉に影響することが指摘(71-3)1960 年代の配偶者選択はア=プリオリにオスの問題とされた:メスの側からの視点

第6回方法論研究会

はあまり考慮におかなくても問題ないとされていた

個々のサルの行動が順位に還元できるとし、サルたちがくりひろげるさまざまな社会 交渉からのイメージを受けとめることに失敗した

→1970 年代以降、サルの「性」関係の網の目をひとつひとつ抑えていくことこそ大事であるとされた

順位が高いオスが必ずしも交尾を優先的におこなっているわけではない,メスのほうが選択している可能性も捨てられない,日常的な毛づくろいなどの交渉が多いオスとメスは性的な交渉を避けているといった**イメージ**

→定量的な資料で裏打ちする作業(しかし、そうしたイメージ自体定量的な分析によって形作られ変化するので、イメージ→分析という一方向的なものではない。データ分析以前の人間の視線など偏見まみれである。分析はイメージを刷新するし、場合によっては偏狭にするが、後者ばかりが強調されるべきではない。理論ももちろんこうした偏見からひとを解放するし、文化人類学者むしろそちらの効果をありがたがる。) 親和的関係もまた、フィールドでの「あのオスとメスは伴食や毛づくろいなどの交渉においていかにも親しげだった」という自分のイメージの再確認によってはじめて血肉を持つ

(72-2)同じ現象を観察し、同じ数値を得ても、どこに狙いを定めるかで異なる結論が出てきても驚くべきことではない

→ゲーテが強調しているように、自分が受けとる印象を絶えずチェックしつつ、自分がア= プリオリに信じ込んでいる先入観に影響されないよう努力しなければならない

→自分のイメージのどこかに狂いが生じていたならば、手元に集めた数値が厳密なものであっても、仕事としては失敗というべきなのかもしれない

(72-3)こうした「イメージ」の強調は、仮説→実験→検定という正攻法を排しているように受け取られるかもしれないが、そうではない:仮説がイメージに充分支えられていることが重要

cf. 伊谷が高崎山で「ボス」と「ボス見習い」のあいだの社会的地位の差を感じたとき、 伊谷は2頭の間にミカンを投げるという実験的手段で確認した

結論―現象・イメージ・言葉―

(73-2)現象を目に見える形にするためにも、「自分に見えないもの」を見るためにも、観察法は重要(この「自分に見えないもの」とは結局何のことだったのか?構造論的モデルのような理論的実体のことを指しているのか?それとも、系統的な観察を行うことでそうではない観察からは見て取れないような現象を把握しようということなのか?)

But なににもまして大事なことはサルから受けるイメージを完全に自分のものにすること

第6回方法論研究会

(カスタネダ)

(73-3)サルから受けたイメージがなになのかを自らに問うとき、われわれはその解釈がどの程度まで擬人主義的歪みをひきずっているのかを意識しなければならない(ここでいっている擬人主義的歪みとは、どの程度のことまで指しているのか?社会構造の理解はほとんどすべて人間の理解のアナロジーだったのでは?「よい擬人主義」と「わるい擬人主義」があるのか?)

But 擬人主義的な解釈を頭から非科学的なものとして退けるのは「裏返しの擬人主義」にすぎない

本人は擬人主義を排して科学的に処理しているつもりでいるにもかかわらず、知らぬまに 先入観が忍び込んでいるとしか思えない研究も稀ではない(擬人主義の対義語は科学主義 だということ?)

現象がわれわれに与えるイメージを素直に評価するなら、そのイメージを与える原因は なんなのか、そしてつい擬人主義的に解釈してしまう自分はいったい何者なのかを自覚 してみることのほうが実り多いはず

その作業のうちに自分が、サルがごくあたりまえにふるまう光景のどの部分に注目し、ど の部分を見落としたかを思い知らされる

(73-4)自分の印象を「言葉」にする際、「言葉」をなんの自覚もなく無反省に使うことは避けなければならない

さらに:**言葉**を口にした瞬間、**言葉**がもたらすイメージに逆に拘束されないようにすること e.g. 順位という言葉→闘争, 敵対という言葉を連想しがち

But こうしたけじめがつかない連想が、行動の意味の理解からますます遠ざかる結果に終わることだけは間違いない(そうだろうか?この論考自体、かなり外部からの言葉によって与えられるイメージに着想を得て、それによってサルの社会の理解を進めているようにみえる。)

目に見える現象を言葉によって理解しようとあせるより、自分の感性をとぎすまし、素直に「感じとる」ことのほうが大切(学生に文化について教えていると、「自然な感覚」とやらにもとづいてすさまじい差別や偏見や無知を垂れ流したりするので、まるで同意できない。サルについても同じことが起きているに違いないはずなのだが。それともそれは、感覚を研ぎ澄ますことが足りていないから、という話になるのだろうか?むしろ足りていないのは知識だろう。)

(74-4)言葉で表現しようとするとき、逆にどんなイメージをその言葉に託そうとしているのか、たえず自分に問い続けるべき

それはサルを理解しようとするとともに、自分をも理解しようという作業:冒頭のレヴィ

第6回方法論研究会

=ストロースの引用にあるように、ルソー以来の目標

その意味ではフィールドなど存在しない:われわれがいる場所すべてがフィールド,「彼ら」と「われわれ」の区別さえもそれほど意味があることではなくなるだろう

そうした視点に立つ限り、イメージがわれわれを裏切ることも、そしてわれわれがイメージを裏切ることもありえないと信じたい

手練手管に淫することなく、近代主義的考えにもとらわれず、自分のイメージを疑いなが らも検証していく作業

(74-5)手がかりとしてのイメージの話は、「共感法」(河合雅雄)(とは?)とは必ずしも一致しない

サルに同化・共感しなくても、イメージを得ることに無理はない,差異を感じることによってもイメージを得ることはできるはず、感じとればメッセージをもたらしてくれるはず

終わりに

(74-6)チンパンジーの子殺し:チンパンジーの殺意とは何か?

→高畑「われわれ人間だって、人を殺した後で、その殺意がなんだったかわからないことが あるんじゃないですか |

コリン・ウィルソン: 殺意を真にわれわれの問題として考えようとすれば、論文が判事の判決文に終わってしまうのはあまりにむなしい(この段落全体がすこし迂遠で難しい。つまり、出来事の社会的意味を自明視して、目の前で生じている現象・過程に盲目になることの危険性を説いているということ?)

われわれ自身のうちに「共犯者」としての可能性を感じとるべき

(75-2)「われわれ自身を知ろう」という姿勢をどこまでも追求するなら自分がいったい何に感じたかということと同時に、何を感じなかったかを絶え間なく問い続けなければいけない

e.g. 「未開」の地で呪術に驚く→まったく理不尽な理由で不幸に陥る人を目撃 →不合理, ultimate な理由を報告

But 私たちは自らの日常をそれほど理解しているだろうか

エンツェンベルガー『政治と犯罪』,日本でも犯罪者が告発され、裁かれているが、われ われはそれをどうやって犯罪であると納得しているのか?:霊長類学者としてわれ知ら ぬうちに、子殺しをしたチンパンジーの「殺意」を裁くべき判事の座に坐るはめになって いなければよいのだが。

第6回方法論研究会

全体の雑感

● 言葉と観察法の役割について、霊長類学者はみなこの論旨に同意するのだろうか?:すなわち言葉は人間の志向を束縛し、現象を「見えなくする」ものであって、「見えるようにする」ものではなく、観察法こそが現象を「見えるようにする」ものであるという考えに

わたしはすでにコメントしてきたように、こうした考えにほとんど同意しない。言葉は目を見えなくすることもあるし、見えるようにすることもある。文化人類学者は伝統的に言葉が「見えるようにする」役割を強調してきた

- 数量的なデータだけを見ていると、「現場を一度でも見たことがあれば『そんなんおかしいってわかるやろ』と言いたくなるような推論をやってしまうということに対する 危惧」は、ひょっとすると統計的分析をやる分野ではありふれたことなのかもしれない しかしそうした「おかしな統計的分析」に「素直な感性」みたいなものを対置するロマン主義は、やはりいただけない
 - ▶ そういう「素直な感性」に頼った結果が、メスの「自然」(生理学的変化と性行動) とオスの「社会」(順位と繁殖成功の相関)を見ようという偏見なのでは?
 - ▶ そうした偏見を正すのは感性ではなく理性
- しかし、この考えは「科学的(統計的)方法論によって、悪しき擬人主義から適切に距離をとることができる」という信憑と(ひそかに?)結びついているようにも見える
 - ▶ そうであるとすれば、単に「言葉の役割を誤解している」で済ますことも難しい: 霊長類学者が「擬人主義」に対してかかえているように見えるアンビバレンスを、 私はどう理解したらいいかまだ分からないのだが、この概念との格闘は「ユズレナイコト」として抱えているのではなかろうか

● 松田論文との比較で

- ▶ いかにも「人類学者らしい」文章と、(私がこの研究会でかかわっている)「霊長類学者らしい」文章との対照にみえる:重視しているものの違い,語ってきたことの違い
- ▶ 私が高畑論文に対して感じる雑感について、おそらく霊長類学をやってきた人は「霊長類学の文脈の理解の欠如」を見てとるだろう:その理解の欠如は喜ばしいことか、忌むべきことか?
- ➤ 私は、松田論文の置かれた文脈にあまり沈潜しすぎないのがよいと思う:それは、 記述の再帰性 (reflexivity) に関して確かに時代を超えて妥当する重要な知見をも たらすものではあったが、同時に民族誌論的反省が人類学の中心的流行であった という (文化人類学にローカルな)事情でもある

第6回方法論研究会

▶ 同じような腑分けは、大村さんがこれまでの方法論研究会で述べてきた議論に対しても適用されるべきだろうとも思う(とくに「適応」を使わないということについて:人類学における「解釈学の流行」とどの程度距離をとるべきか?)

- ▶ これは私自身にはどのようにアナロジカルに適用されるべきか?
- ▶ 意味創造の主体としての人間:人間以外に適用可能な思想か?(「経験する主体としてのサル」の変奏ともいえる)

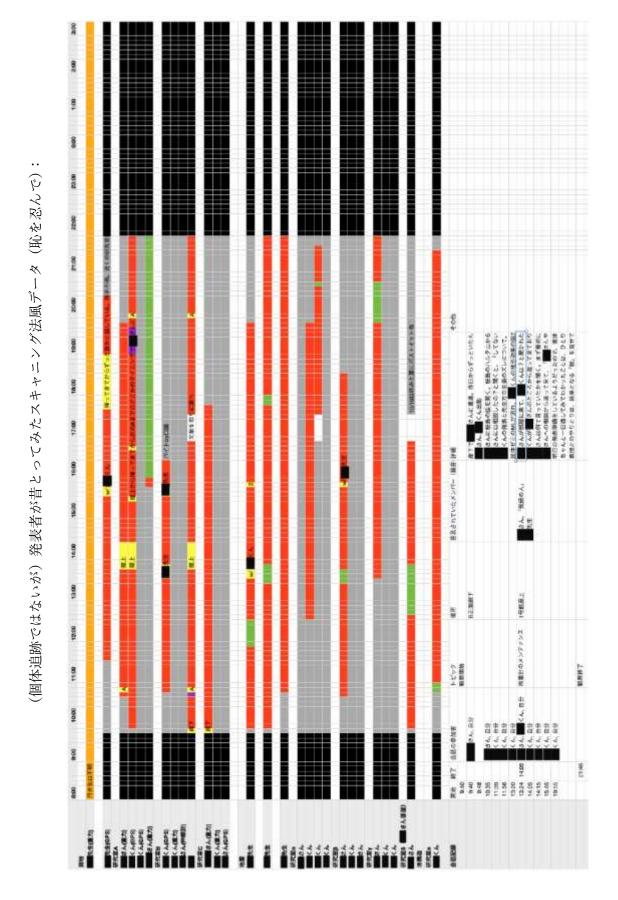
サルの、主体としての、構造を超える力を正当に評価することはできるのか?高畑論文では人間が社会構造を帰納している。それは統計を使った一見主観の余地のない客観的な方法にみえて、概念の選択や区切り方をつうじて、暗黙裡に私たちの「常識」が(生物の理論や社会の理論の顔をして)入り込んでいる

しかし、記述間の比較によって「より適切な」記述を選びとるという方法を つうじてであれば、サルが人間の社会についての常識を超えて、自らの社会 とその意味を創造しているという考えに説得的に意味を持たせうるのでは ないか?(という投機)

「パントフート」とか「プレイ=バウト」といった、人類学者からは説明されないと何を言っているのかが分からないような概念—それは既存の人間の行為類型に還元することが難しい構成単位として、しかし豊かな意味をもったものとして想像されているように見える—の中に、そうしたものを人間が記述する際に考案せざるを得ないということ、サル自身による意味の創造の契機を人類学者は感じとる

その他

- 「民族誌の正しい書き方」があるなら人類学者も苦労はしない:分かればみんな素晴ら しい民族誌を書いている
- 松田論文の理論的理解は、理論的-形而上学的(高畑の言い方でいうところの「ア・プリオリな」)前提であると同時に、持っている(主に語りの)データをどういうふうに組織化するかについての議論である:そうした組織化についての議論によって、一定の方向性に背中を押され、促されるようにして(ある仕方で記述をくみ上げてもよいが、別の仕方でくみ上げることはまかりならないという仕方)で、人類学者は自分の抱えるデータの中になんらかの秩序を見出して民族誌をくみ上げてゆく
 - ▶ そのため、理論における形而上学的前提と「民族誌の書き方」は、文化人類学において区別されない:文化人類学において理論は、記述において書き手を促す力として作用している



22

第6回方法論研究会

10分おきに全個体の所在を観察、行動種別と会話趣旨を記録

凡例: 赤はその人がその人の所属する部屋にいたこと、黄色は誰か別の人と一緒にいたこと、 緑は「出席板」に出席表示はあるが所在が不明なことを示す

- 2012-2015 にかけて断続的・非系統的に記録,取得項目も期間の中で拡充,2012 年 9 月から 11 月にかけて重点的に取得,主に 2012 年度の学生との会話記録を取るため&昼型・夜型の院生がいるかどうかを確認するため,定量的な分析としては結局一度も解析・発表せず
- 会話や別の定期的活動に参与すると観察が空白化する→当時は系統的にデータを取る ために会話に参与することを諦めるという断固たる意思はなかった(会話から得られ るデータのほうが重要に感じていた;こうしたデータを取って何ができるのかも分か らなかった(し、今もよくわからない;結局分析は個体に焦点を当てたものにもなる))
- かなり嫌がられる (個体追跡法よりはやりやすいかもわからない),海外 (インドネシア)の測地研究室でも実施したが「お前はスパイか?」と言われ関係悪化,結局そこでの調査は断念,ラポールに影響があるのでかなり「うまくやる」必要がある,ヒト-サル共通でこういうことをやるという話なのか?etc.,

観察方法を統一することが(計画調書によれば「同じ概念」すら用いるという—高畑論文はたしかに用いていた、それについてどう考えるのかはぜひ意見を聴きたい)、本当にヒト-サル比較の共通の基盤を成立させるのかどうかという点に関して、(いまさらちゃぶだい返しのようで恐縮だけれども) いまだにそれほど納得できてはいない

むしろこれまでの経緯は、方法の比較をつうじて、両者のあいだにどのような差異が明ら かとなってきたか、を示すものに見える

お互いにどこに乗り越えるべき課題があるのかということを明らかにすることのほうが 重要なのではないか

第6回方法論研究会

4. 議論のまとめ

I. アルゴリズムについて

アルゴリズムという言葉の意味ついて

- ・AA 研コロキアム「ヒトを見るようにサルを見る」のコメンテーターの田辺明生さんが述べていたアルゴリズムとはなにか。
 - → 適応度の最大化のために効率的に反応していくものがアルゴリズムのあり方である。 「自由意思をもち経験する主体」の対比として「生物的な背景で効率的に反応するも の(アルゴリズム)」を考えている。
 - → アルゴリズムは、適応度の最大化を目指すという目的のみに限定されないだろう。環境の入力に対し計算をおこない、でてきた答えで行動を表現する。そこには葛藤や決断というものがない。
- ・アルゴリズムという単語はコンピュータープログラムの上位概念である。プログラム書く前にアルゴリズムを書き出し、その後 Python のスクリプトに書き直す。つまり、動物に当てはめると、あたかもコンピューターのプログラムを実行するもの、感性のあるなしに関係なく、プログラムを実行するというコンセプトである。生物学ではアルゴリズムは最適化されているはずであると考えられている。

経験する主体とアルゴリズムの<あいだ>

- ・コロキアムの田辺さんの話では、経験する主体とアルゴリズムの<あいだ>をねらうという話であった。<あいだ>に感銘をうけた。今回紹介のあった松田論文も高畑論文も<あいだ>を狙おうとしている。
- ・人類学者と霊長類学者の採用する手法で、データの偏りについて考えた際に、アルゴリズムの話ではないかと感じた。慣習的行動は、人類学でみたときのアルゴリズムなのではないかと思う。例えば、授業をする際に見渡すと、「あいつら、あそこにかたまっているなぁ」とか、誰でもよくみる光景だと思う。ただ、人類学者は意識的にそのようなデータをとっておらず、アルゴリズム的な部分を統合したときにどのような構造がでてくるのかはわかっていない。霊長類学者はアルゴリズム的な部分をよく観察しており、それを記述する術を知っている。逆に主観的な行動というのは、人類学の場合は、例えば紛争がおき始めるときに人々がどう行動するか。大きな事件が起きた際に、初めてその主体的なものの一端をとらえられるのではないかと思う。アルゴリズムと主体的な行動のくあいだ>というのは、イメージとしては、日々の人類学者のみていない行動となにかの突発的なときにたちあわれる「ほのかな主体的なもの」とのあいだと、日ごろ一緒にいる人びとの意思決定のようなものとが出会う場所なのではないかと思う。
 - → アルゴリズムは説明のひとつであり、そのアルゴリズムはなにを説明しているのか

第6回方法論研究会

というと、反復される現象を説明している。いわゆる「共存のパターン」というある種の社会性が生じるのは、反復的になにかが生じるということである。アルゴリズムは説明のひとつであり、記述の部分に関わってくるわけではない。反復される現象をどのようにすくいあげるのかが大切である。伊谷論文(1981)の第八類型は「社会性」という問題に関しては中核的な意味をもつ。「許す、許さない」がないと、ある相互行為が反復的に現象としてあらわれないのではないだろうか。

II. 紹介論文の背景について

松田論文(1989) について

- ・環境社会学のなかでの生活環境主義と人類学のフィールドワークが続けて考えられているということを外して松田論文を読んでもあまり意味がないのではないか。
- ・松田論文の「統辞論的」や「範列的」という言葉は言語学の意味で解釈するとずれてしまう。あくまで例えでとらえる方がよい。松田論文が述べている「統辞論的」とは現代の主体性のセントラルドグマであり、語りには主体があると信じている。「範列的」というのは、日常では、選択肢がたくさんあり、主体的に選んではいないということであり、それが、普通の人がもっている日常性である。例えば、ある物事に対して、ある日は賛成、ある日は反対ということもあるだろう。アルゴリズムに従ったものを主体性とすると松田論文が述べているものとは反対の意味となってしまう。松田論文の話は、ミシェル・ド・セルトーやジェームズ・C・スコットの Weapons of the Weak あたりの議論となるだろう。
- ・共約不可能性はなにかというと人が理解するには共通の基盤がないといけないという思い込みである。同じ言語を共有していない、同じ論理を共有していないから、ある2つの文化の人々は互いを理解できないのではないかという話があるが、松田論文はそんなことはないのではと述べている。田辺繁治先生の時代から続くピエール・ブルデュー以来の実践の理論の流れを汲んでいる。理解→実践(統辞論的な理解)ではなく、実践があるから理解があるという考え方である。共約可能性は、実践によってつくられるものであり、初めからあるものではない。

高畑論文(1989) について

- ・高畑論文は学生実習の資料として使われていた。初めてサルを見る人に対し、ものの見方がこのようなものを通してみているということを教えていた。サルを全く知らない人に、サルを見せに行くといろいろなことを感じる。いったいそれをどのように他人にわかるように表現するのか。そこをまずは通過してみようということである。
- ・初期の霊長類学は数字抜きで描いていたが、社会的にそれがなかなか自他共に通用しなくなってきた。そして、数値化する方向に動いていった。みえているけど、それをどのように数値化するのかということに最初に直面したのは高畑さんである。特定のオスとメス

第6回方法論研究会

が一緒におり、嵐山に行くと「そうそうそういう奴がいる」とみな知っているが、数値化してはいなかった。高畑さんの功績はそれを数値化したことである。見える社会と論文に書けるデータをいったりきたりするのは、文化人類学も霊長類学も直面する問題ではないだろうか。

- ・高畑論文を読んで、この論文が経験する主体とアルゴリズムの<あいだ>をとろうという話をしているということはどこから読みとればよいのかはわからない。この論文のなかで、言葉と観察法の逡巡のような話はでてこない。
 - → サルは話さない。観察対象の言説から距離を置こうということはそもそも考えていない。高畑論文が問題としている「言葉」は、研究者側が安易にサルの行動を自分の言葉に落とすことについて警鐘をならしている。この高畑論文はアルトマンの方法論を紹介しつつ、複雑な立場にあったと思う。賛意を示しているが、それだけではないもやもやしているものも書いている。読む際に、高畑さんの主張とアルトマンの定式化の腑分けが難しいかと思う。また非常にややこしいのは、アルトマンも方法論的な客観性を求めるということと、見たものをかたちにすることの腑分けはできていなかった。アルトマンに始まる行動観察方法論は、野外にいながら、実験室と同様に仮説を検証する方法論として洗練されている。高畑さんは、アルトマンの方法論を自分のみたものをよりよくより詳しく表現するため、自分自身の主観で見過ごしているもの見つけることのできる手段の1つとして紹介している。しかし、方法論に頼りきりになると、自分なら気づけたものを見過ごすことにつながるとも述べている。

Ⅲ.研究のフレーム・観察者バイアス

フレームについて

- ・昨年の AA 研コロキアム「ヒトを見るようにサルを見る」で発表した際、その行動のフレームはなんなのかと尋ねられた。サルの行動を観察し、それを解釈する際に擬人主義的な要素が入りこんでしまう。一方で、人間を対象としていても、文化の異なる地域に住んでいる人々の行動や文化をとらえて文字に落とす際に、無意識に私たちの恣意的な解釈が入るということはあるのではないか。
 - → 現場で人類学者が現地の人と交流しているときは二人称的な関係(私とあなた)でやりとりをする。フィールドから帰り、民族誌をかくという段になると、読者・説明する相手は、私たちの文化の人々になり、その人々に説明しなければならない。フィールドから帰ってきた後、フィールドにおいては当たり前に共有されてきたものが、帰ってきた後に共有されなくなってしまう。私と彼らが共有してきたものを説明するにあたって、「私たちの社会はこういうときにはこうふるまうが、彼らの社会ではこういうときにはこういうふるまいをする」という、説明の図式として浮かび上がってしまう。現地にある文化や社会というものは、客観的に想定されるものではなく、「フ

第6回方法論研究会

ィールドワークから民族誌をかく」という行為のなかで、文化をプロダクトとして発明する必要がある。彼らの文化を想定した時に、私たちの持っている概念を彼らの社会の分析に適用していいのかという話がある。それがさっき述べていたフレームの問題ということだと思う。

→ 1980 年代の松田論文時代の人類学の議論では、私たちがもっている社会に対する普 遍的な概念だと思っていたものが、普遍的ではなく、実際にはフィールドのできごと の中から彼らにとってはどういう区別が妥当なものなのかは考えないといけないと いう話になっていた。

フィールドでみてわかること

- ・文化をどう理解するか、フィールドでみてわかってしまうときがある。ただし、私があのときわかったと思ったことをわかったことにしてよいのか、サルの相互行為をみて、わかったことにしてもよいのか。例えば、住民運動時にそのときどきで話すことが変わるということを一貫性がないというのは違うのではないのか。どのように記述に生かしていけばよいのだろうか。
- ・「その場でわかっちゃうことがある」という話を他の方がしていたが、逆にわたしは現地 の人に解釈を直接尋ねないとわからないことが多い。データをとり自分で解釈をするこ とができないため、私は現地の人に解釈を教えてもらうということをしている。最後に日 本と比べたらどうなるかなというところだけ考察する。

ジェンダーについて

- ・人類学者は、フィールドに入ると、自分のジェンダーや年齢の立ち位置から社会をみる。 霊長類学者もジェンダーで違いはあるのか。
 - → おそらく霊長類学者は、人類学者ほどにはどちらかのジェンダーしか観察できないということはないのではないか。ただ、一般論でいうと、研究テーマ設定については、例えば、肉食や攻撃は男性研究者が、母子関係は女性研究者がよくテーマとするようである。
 - → ダナ・ハラウェイの Primate Visions という本の中で、『日本人の男性研究者がニホン ザルの母子間関係やメスについてよく注目しているのは、白人男性中心主義の外側 にいるからだ』と述べられており、欧米の人に「本当か」と尋ねられる。日本人の男 性研究者がメスに着目したというのは歴史的事実であるが、ニホンザルの社会はメ スが目立つため、たまたま着目されただけだと思う。

IV. 方法論

サルにおける「語り」の扱いについて

第6回方法論研究会

・松田論文での「語り」の理解について考えると、そもそもサルでは「語り」はない。松田 論文の「語り」の部分を、サルでは「行動」と置き換えて読んだがどうだろうか。

→ 私は「語り」を「行動」ではなくむしろ「(霊長類学的な) データ」に近いものと捉えている。語りから記述を生み出し、理解にいたるというアナロジーとして、データから記述ができ、解釈にいたるものとして捉える。その場で、人々が話していることを全て書くことはできない。そして、「書きとめられた言葉」というのはフィールドノートに書かれたものである。それをデータと考えると、語りは霊長類学者が操作的な行動のカテゴリーを数えていったものと同じものとして捉えられるのではないか。別にそれは、「語りも行動である」と言っているわけではなく、フィールドノートに書かれた「行動」に近いのは、「語られたこと」かなという感じがする。

個体追跡法について

- ・「社会に注目していながら、個体追跡法が重宝されているのが不思議」ということであったが、まず社会に対する注目というのは日本の霊長類学が最初に行ってきたことである。 個体追跡法は、欧米の霊長類学からでてきている。高畑論文が書かれたころは、社会生物学が霊長類学の中心的な考え方に少なくとも欧米ではなっていた。社会生物学は社会そのものをみる学問ではなく、個体、ないしは個体の遺伝子に還元することで社会行動を説明しようとする理論である。その意味で、個体に着目することはわかりやすいことなのだと思う。
- ・一方、私は個体追跡法を使っているが、個体の戦略をみようというわけではなく、その追跡している個体の視点に重ねて社会をみている。つまり、社会全体をみようとしてもなにに着目するのかよくわからなくなる。とくに、チンパンジーの場合、スキャニングのみをしていると、ある個体がいなくなったことしかわからない。しかし、その個体についていくと、「こういう理由であいつはここから離れたな」というのがわかることがある。個体をみながら社会をみるという意味で、個体追跡法を使用している。
 - → チンパンジーの社会は、集まらない社会であるため、集団をみるということは難しいのだろうと想像する。しかし、ある広がりをもった群れ全体をみて、そこから社会を考えるという視点も大事だろう。そういうものは個体追跡法では弱くなるだろうと思い指摘した。
 - → チンパンジーの単位集団の存在は、西田利貞さんが明らかにした。西田さんは個体追跡法を使わず、集まりに着目していた。そのため、単位集団の存在が明らかになった。 当時、個体追跡法は日本人にとっては一般的な方法ではなかった。
- ・人間の場合もサルと同様に社会全体をみるということはそもそもできないのではないか。 人類学でも、特定のインフォーマントを中心に、インフォーマントから広がる社会を理解 していこうというやり方があると思うので、そういう意味では、共通する部分があるので はないか。

第6回方法論研究会

→ 人類学者も社会をみる際に関係をみるとか、その 1 人のインタラクションをみる。 お互いの関係のなかに社会がみえるという言い方をする。霊長類学で、1 個体、また は2個体のインタラクションをみることのなかに社会がみえるというのは、さほど 不思議なことではない。

→ 霊長類学者が個体追跡をする理由として全部見られないからということだったが、 霊長類学者のほうが人類学者よりも全体をみている気がする。人類学者は数人と連 れ立ちどこかにいくことがあるが、その地域集団がなにをしているかはみえない。そ ういう意味で、むしろ制約が大きくかかるのは人類学者だと思う。人類学者が他の部 分を知っているかのように話せるのは、調査者が「今日はなにをしたの」と尋ね、教 えてもらうことができるからだろう。しかもそれもほんの数人からしか聞けない。対 象としている民族全体はとても把握できない。そのため、人類学者が、あたかも全体 を把握しているような気がするのは、間接話法から人々の解釈をより合わせて、「こ れはこうだったんだ」と思っているにすぎない。

直接観察できない場合の方法論について

- ・私の専門としているのは、直接観察できないサルである。GPS であったり、カメラをつけたり、遺伝子やホルモンを調べたりする。今回はすべてが直接観察法のなかでの議論であるが、霊長類学では、間接的な資料を使用する場合もある。人類学者がどういうかたちで、間接的な資料をとるのかはわからないが、そういう点で、類似点はあるのだろうか。
 - → 文献を使用するし、GPSを使用したり、ヒアリングしたりもする。ただし、GPSを 持ってもらっても、途中で切ってしまったり、落としたりする。人によるが、私が調 査している集団の男性は GPS をつけるのを嫌がる。
 - → 文化人類学者として回答すると、私が研究テーマとしてきたのは、20世紀末に生じた内戦の経過と、その後の関係修復のありかたがどうなっているのかということである。実際に調査に入ったのは内戦が終わってから5年以上たっていた。内戦時代のできごと、例えばそのときになにをしたのか、なにを食べたのか、どこに逃げていたのか、直接観察できない暴力についての聞き取りや、村でのマッピングなど行った。リアルタイムに内戦中に国際関与していた組織の当時作成した報告書(歴史資料)を間接資料として使用し研究を進めてきた。こういうものが、人類学の中での間接的な資料といえるかもしれない。

(以上)